

郷土らがさき



春の海ひねもすのたりのたりかな (蕪村) photo 前田会員

第145号

発行 令和元年5月1日
発行者 茅ヶ崎郷土会
会長 平野文明
編集責任 平野文明

柳島に今も継続するチョウガシラのこと	杉山全	2
学び舎と私	尾高忠昭	3
私の故郷は平塚です	久保田洋治	4
紀州 田辺	山本俊雄	5
史跡・文化財めぐり報告	源 邦章	6
風 (自由投稿欄) 二題	前田照勝 今井文夫	10

しぶとく、飽きずに、ねばり強く

知っている人は知っているが、知らない人は興味もなく全く知らないと思いますがクマガイソウという野草があります。

私が芹沢の一角に引越して四十年になります。そのころ、隣の竹やぶや雑木林の中に、エビネ、シュンラン、キンラン、ギンランなどがあり、クマガイソウも群落でありました。それらはその後、次第に姿を消して、シュンランだけが、庭の中で大きな株になって、大きな顔をしています。

それがです。去年の三月、庭のドウダンツツジの下にクマガイソウが二本出てきたのです。そこは、築山風に土を盛ったり、草木を植えるために何度も掘り返したりした所で、昔、クマガイソウがあったという所ではありません。今年は三本になって、その中の一本はつぼみをつけました。不思議なことがあるものです。この野草、なかなかしぶとくて粘り強いなあと思うのです。花が咲いたら会のHPで公開します。

今、茅ヶ崎郷土会の存続に赤ランプが点滅しております。ここは一つ、しぶとく粘り強く、クマガイソウを見習ってやっていくことが必要だと思うのです。

平野文明

柳島に今も継続する年齢集団

チョウガシラのこと

杉山 全 (すぎやまたもつ)

柳島には、以前(昭和初期までか?)、ワケーシュ(若い衆)と呼ばれる男子の組織があった。一七歳になると仲間に入ることが出来た。それなりの手続があり、正月十四日にセート(道祖神のまつり)が行われる。その時、村(地域単位)の青年層・戸主層の集会所が八幡宮の神楽殿であり、その時一七歳になった者はオオワケーシュ(大若い衆)の面々に酒の酌をして回る。「よろしくお願います」という訳である。これをすまずと、仲間に加えてもらえないのである。

仲間に入ってすぐの者は小ワケーシュと呼ばれる。漁に参加した時などは、一人前のシロワケ(代分け)がもらえる。会合をする時の下準備や上級のワケーシュの使い走りをさせられる。小ワケーシュを一・二年でワケーシュである。結婚しても仲間には抜けない。四〇歳近くになるとオオワケーシュとよばれる。

これらワケーシュのとりまとめはカシラ(頭)と呼ばれ、宮世話人が担当した。

四〇歳近くになるとチョウガシラ(丁頭)という祭りの世話役を務めて、ワケーシュの仲間から抜ける。

ワケーシュが力を発揮するのは祭礼の時で、幟を立てたり、舞台をしつらえたり、神輿をかついだりが仕事であった(『柳島生活誌』・一九七九年茅ヶ崎市教育委員会刊行より引用)。

この習わしが現在も続いている。地域内の組織集団は幾多の変遷を経てきたが、チョウガシラ(丁頭)制度は今に受け継がれている。

木々の緑が色濃くなるころに浜降祭の準備が始まる。先ず、自治会の丁頭に該当する年齢の人を対象(満年齢三六歳〜四八歳)に、丁頭として参加するかどうかを自己申告してもらう。登録メンバーにより会合がもたれ、丁頭が組織される。四八歳組が互選により丁頭長、副丁頭長、会計などを決める。その年の浜降祭だけでなく、地域内の神輿渡御など、神輿に関する全ての執行を任される。

四八歳の一歳下の四七歳は補佐役に、四六歳は交通整理役に、四五歳を接待役に委嘱する。また三六歳と三七歳は子供神輿の担当となる。その他の年代は神輿の担ぎ手の中心となる。

中学校を卒業以来、久しぶりに同級生が再会する。そして、地域の大事な行事を共に行う。その行動で連帯感が醸成され、祭りを盛り上げることになる。もちろん、柳島に新しく移住された方々の参加も大歓迎である。

昭和初期の「ワケーシュ」から「丁頭制度」へと移行されたこの制度は今も継承されている。年齢と共に、自治会・宮役員・長命会などの活動へと、それぞれの年代に応じた役割を担っている。

地域の必要な役割を特定の人だけが続けるのではない。順送りに繰り上がっていく。それぞれの年代の人同士が助け合い協力しあいながらその時代を乗り切っていく。それらの活動は次の世代

特集 私のふるさと

学び舎と私

私は昭和二十四年四月に茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校へ入学しました。昭和二十二年四月の学校教育法(六三制の新学制)施行の二年後で、同年十月の市制施行から一年半後でした。

小学校入学前は海岸通り(共恵)の恵泉教会の所にあつた恵泉幼稚園に二年間通いました。園長先生は戦前に南湖院にいらした高橋誠一先生で、通りの道の反対側の素敵な洋館にて生泉堂病院の院長をされておりました。

クリスマス会では白い付け髭を着けたサンタクロースのお姿がよくお似合いました。アメリカ軍の兵隊さんが色とりどりのチョコレートやキャンデーをプレゼントしながら、参加してくれました。しかしどこから来たのでしょうか。

児童劇は、キリスト誕生にまつわるお話しがお決まりで、私はベツレヘムの星に導かれてキリスト誕生の厩(うまや)に向かう三人の博士の一人を演じました。

茅ヶ崎小学校の一年生は一一組あり、私は一年三組でしたが、

へと引き継ぐことと、地域活動に参加する機会の基ともなっている。これからも継続されていくことを願っている。

尾高忠昭

二年生になる時、各組から四、五名ずつ選ばれて一二組ができて、私は新設の二年一二組になりました。二部授業の始まりです。

茅ヶ崎町・市にとって新制中学の創設と運営は大変な負担であつたと思いますが、茅ヶ崎小学校は、昭和二十七年四月、児童数三七三〇名、学級数六七学級の大規模状態でした(市史4近現代)。

茅ヶ崎小学校には給食袋持参で登下校しましたが、どんな物を食べたか思い出せません。ただ新しくできた給食室(給食場)のモルタル壁にもたれて、友達と当時流行の「お富さん」を歌ったのを思い出します。

昭和二十六年、三年生のときの九月一日、二学期の始業日は雨天でした。突然、「南湖の子供は荷物をまとめて西浜へ行け」といわれました。お別れ会など何もなく、可愛いあの子には明日から会えなくなるという無情の雨でした。私を含め大半は下駄履き

で通学していましたが、その日、藁草履の女の子もいて、茅ヶ崎小学校の通学口から、雨の中を、落ち武者のように、海岸通りの砂利道を西浜小学校まで歩いて行きました。

六年生は茅ヶ崎小学校に残り、彼らは卒業後、茅ヶ崎第一中学校へ進学しました。昭和二十九年に、新設開校した西浜中学校の一回生は、この時茅ヶ崎小学校から都落ちした五年生でした。(私は二回生になります)。

新しい西浜小学校は木造、木の板貼り、平屋の瓦葺きで、南面は浜に面し、校庭と、湘南遊歩道路と砂浜間の防砂林の松はまだ膝位までの高さしかなく、教室から浜と海とその先の伊豆大島を望見する素晴らしい環境でした。しかし西風が吹くと一面砂だらけになってしまいました。茅ヶ崎小学校でもそうでしたが、運動会の一番人気種目は部落対抗リレーでした。西浜小学校で最初の運動会のリレーメンバーが一番に困ったのは、砂浜を走っている

私の故郷は平塚です

一五九六年(安土・桃山時代)に中原御殿の造営、一六〇一年に徳川家康が東海道に宿駅・伝馬制度を制定し、「平塚宿」ができました。

旧国道一号を中心とした歴史のある宿場町です。しかし戦時中は海軍火薬廠が市の中心部に位置していたために、一九四五年(昭和二十年)の平塚大空襲により、市域の約七割が焼失しました。現在は、何代も続く商店街が一九五一年(昭和二十六年)に七

ようで勝手が違ったことだったそうです。

学芸会は、鳥井戸の御霊神社の芝居舞台を運んで組み立てて、地域一体の支援のもと、運動会と同様に、父兄以外の多くの住民参加のもと開催されました。

西浜小学校四年生は四学級で私は一組でした。先生方の移動も激しく、毎年担任が替わりました。五、六年生のときは男の先生でした。お二人とも自宅に生徒を呼んで補習授業をされたり、クラシック音楽のレコードを聞かせたりしてくださいました。

私が六年生になった昭和二十九年春、その年卒業したはずの六年生が皆、小学校に居座っているでは有りませんか。予算執行の遅れのためだったのでしょうか、西浜中学校の完成が遅れ、開校記念日は浜降祭の七月十五日でした。その中学一年生は一学期を小学校の校舎に間借りして、二学期から新校舎に移転したのでした。

久保田洋治

夕祭りを開催し、現在も継続して、関東地方では有名な行事の一つになっています。

また、湘南の海に面し、漁業そして農業も盛んで、近くには高麗山、丹沢の山々があり、気候に恵まれた土地です。

平塚の商店街で、六人兄弟の三男として生まれ育った私は、家の近くの神社(平塚八幡神社)の境内や裏山で遊んでいました。遊びの内容も多種多様で、たびたび悪戯もし、母親が謝りに行き、

父親に怒鳴られたり、打たれたりした事を思い出し、今では懐かしい思い出です。時にはその頃に戻りたいと思うこともあります。約四十三年前に茅ヶ崎に転居して、素晴らしい環境に恵まれ、

紀州 田辺

故郷は和歌山県田辺市です。田辺は紀伊半島の南西部、紀伊水道に面した古い港町です。梅とみかんと備長炭だけが産物の町ですが、今は備長炭もただけ作っているのかよく解りません。

歴史は古く「牟婁の津(むろのつ)」という名で、日本書紀にも出てくる地名です。歌詞の頭しか覚えていませんが、田辺第一小学校の校歌が「牟婁の湊とその名も古き…」で始まっていたことだけを覚えています。

平安時代後期に熊野詣が盛んとなり、田辺は「口熊野」と言われるようになります。上皇、貴族などは紀伊半島の西岸沿いに下り、海岸沿いの道から川沿いに本宮に向かう中辺路(なかへじ・なかへち)の入り口にあたっていました。

源平合戦の頃、熊野三山別当はそれまで本宮や新宮に本拠を構えていたのを、当時の別当湛増(たんぞう)が口熊野・田辺に本拠地を移し熊野水軍を指揮したのです。その湛増の子が武蔵坊弁慶であり、弁慶は田辺で生まれました。市内には何代目かの弁慶松や弁慶産湯の井戸などゆかりの史跡もあります。

湛増は初め平家に味方をしていましたが、戦が激しくなると

私たち夫婦はここを「第一のふるさと」とし、子供たちもこの町が気に入る「ふるさと」として暮らしていくと話しています。

山本俊雄

源氏からも味方をせよと出動をせまられ、困った湛増は、赤白七羽の軍鶏を神社の境内で闘わせます。その結果、白が全て勝ったので源氏に味方することを決め、壇ノ浦に駆け付け勝利に貢献した、と言われています。その神社は、軍鶏を闘わせたことから闘鶏神社(とうけいじんじや)と名付けられています。二三年前に社殿が国の重要文化財になっています。

室町時代には守護大名で管領の畠山氏が一族の争いから紀州を離れ、田辺周辺も豪族・国人の群雄割拠の地となります。しかし豊臣秀吉の紀州攻めによりその多くは滅ぼされます。

徳川時代になると、後に御三家の一つとなる徳川頼宣が和歌山に入りますが、その付け家老、安藤帯刀直次が田辺三万八千石の領主となり田辺城(錦水城)を築きます。城と言っても今は何もなく、わずかに会津川河口に水門が残るのみです。ただ、城址に近い所から上屋敷町、中屋敷町、下屋敷町などの町名があります。

子供の頃は、田辺祭(闘鶏神社の祭礼)に、旧町人町がおかさ(山車)を引き回し、屋敷町などは馬を借りてきて闘鶏神社(通称権現さん)の馬場で、二頭ずつの馬駆けを行い、大変な人気で

した。上屋敷町などはいつも勝てなくて、子供は悔しい思いをす
るので、大人は、お金がないから強い馬を借りられないので
しようがない、などと言っていました。今はもう馬駆けもやって
いないようです。

最近では法事などでたまに帰るのみです。昔は十字路のない突き
当りばかりの細い道が多かったのですが、近年は街も変わり道も
広くなり、昔の面影がなく、寂しく感じます。そこで生活をして
いない者のないものねだりの郷愁かもしれません。自分が年を取
ったせいなのでしょう。以上、余計な話でした。

「私のふるさと」原稿募集

茅ヶ崎市のホームページに、平成三十年の人口は二四万二千人
と出ています。その中では、市外から移り住んだという人が圧倒
的でしょう。編集子も、生まれと育ちは九州熊本です。

史跡・文化財めぐり報告

第二九一回 茅ヶ崎市内の別荘地めぐり

その第五回 「市立図書館から桜道周辺へ」

源 邦章

平成三十一年一月二十日(日) 参加者二四名

今回は柳田国男別荘と別荘グループ「古河村」を中心に巡りま

「私のふるさと」を紹介して下さいとお願いましたところ三
人の会員が応じて下さいました。お名前の五十音順に配置しまし
た。

学校のこと、両親の仕事のこと、食べものこと、遊びのこと、
山野・川・海辺のこと、お祭りのこと、友だちのこと、悲しかつ
たこと、つらかったこと、楽しかった思い出などなど、何でもあ
りです。一人でいくつ書かれても結構です。文章は短くても長く
ても、おまかせします。できたら写真もあった方がいいです。

手書き原稿の郵送でも、パソコンなどで書いてメールに付けて
送って下さっても結構です。

送り先

〒253-0008 茅ヶ崎市芹沢二二三二―二 平野文明

メールアドレス fhirano@ozzio.jp

あなたの原稿を待っております。

す。九時一五分茅ヶ崎図書館に集合し、一時間程、本日巡る別荘
地の人々を案内しました。その後図書館を出発し高砂通りを北
上、柳旅館の前を右折し雄三通りを横切り本日最初の別荘地「岡
崎別荘」に着きました。

岡崎別荘の創設者岡崎文吉は河川改修の権威。北海道の石狩川
や中国遼河での治水工事で活躍するも昭和九年肺結核で茅ヶ崎南
湖院に入院、そして茅ヶ崎に別荘を建築しました。現在でも岡崎

邸は残っておりません、その邸内に記念碑が建っていました。

次いで所謂「古河村」と呼ばれる古河財閥の人々が別荘を作った場所に到着しました。「山田別荘」の山田復之助は古河財閥・

足尾鋳業の技師長。そして「松樹園」と呼ばれた一画には、昆田文次郎は古河財閥の総責任者、小田川金三は古河鋳業の技師長、藤林徳松は古河鋳業の取締役、飯島亀太郎は外交官から古河重役に転職しています。このようにこの一画には柳田別荘を除いて

「古河村」と言われた昆田文次郎を中心とした古河本店の人々が次々に別荘を建築していききました。その真ん中に柳田国男の父直平が作りました「柳田別荘」があります。直平は大審院判事ですがその養子に柳田国男がいます。国男は民俗学者であり日本の民俗学の父と言われています。その著書『遠野物語』は有名。その他に『蝸牛考』『桃太郎の誕生』など多数があります。その長男の柳田為正は後年「資料館だより」(茅ヶ崎市文化資料館)に当時の回想を寄せています。

その後「西村別荘」「寺田ヒロオ邸跡」「城山三郎邸」を巡りました。西村別荘は西村富三郎が昭和初期に建築しました。西村富三郎は慶應義塾大学の教授から理事を務めた人物。その別荘は当初は南北一五〇以、東西一八〇以の広大な物でした。現在でも、多少狭くなっていますが昔の面影を残しています。西村邸を南下しますと寺田ヒロオ邸跡に到着しました。寺田ヒロオは漫画家であの「トキワ荘」の漫画家たちのリーダー格でした。代表作は『スポーツマン金太郎』でヒロオの妻はあの有名な作曲家村中八人の妹との事。寺田邸から三分で「城山三郎邸」に着きます。城山邸には今でもその娘さんたちが住んでいます。城山三郎は愛知県出身、『落日燃ゆ』の広田弘毅、『辛酸』の田中正造、『官僚

たちの夏』の佐橋滋など実在の人物をモデルとした伝記小説・経済小説・戦争小説を描きました。茅ヶ崎へは戦後移住、駅前のマンションの執務室やラチエン通りの散歩道等にその足跡を残しています。

城山邸を後にして北上し桜道を東に向かいラチエン通りを横切ると直ぐに雲雀ヶ丘小学校跡に着きます。同小学校は上田三郎によって大正十四年に設立されました。小規模で一人ひとりの個性に応じた教育をスローガンに展開されましたが、当時の現在地の開発が進まず昭和二年閉校に追い込まれました。上田三郎の二人の息子のちに日本共産党の幹部となる上田耕一郎、不破哲三の兄弟です。再度ラチエン通りに戻り同通りを北上しますと踏切にぶつかるその東側一帯が茅ヶ崎初期の菱沼異人館ホールデン別荘です。ここは第一次世界大戦の旧ロシアの傷病兵のサナトリウムに使用されていました。ホールデン自身は英国人で妻は日本人の三橋リセです。

ホールデン別荘跡で解散しました。その後バス停まで案内して別れました。

第二百九十二回 茅ヶ崎市内の別荘地めぐり

その第六回 「中通りを東海岸南へ」

源 邦章

平成三十一年三月十七日(日) 参加者 五一名

今回は「石川村」を中心に鉄砲道の南側で高砂通りからラチエン通りまでの間をご案内します。九時一五分に図書館に集合、ま

ず「民話の会」の皆さんに茅ヶ崎の民話の内「八大龍王」について演じて頂きました。その後当日巡ります別荘人の紹介を二時間程しました。一〇時二〇分頃より別荘地巡りを始めました。

今日は三〇人ほどの別荘人を案内しますが、前半は主として岩倉邸跡、徳大寺邸跡、土井邸跡や山階宮邸跡などの皇族や貴族、そして中盤は旧加賀藩の人々が集まって出来た「石川村」、次いで最後に広田精一などの有名人を紹介していきます。

まず岩倉別荘跡へ行きました。高砂通りを南下し恵泉幼稚園の手前左側一帯が岩倉邸跡です。岩倉具憲は明治の元勲岩倉具視の曾孫に当たり、その姉の小桜葉子が上原謙と結婚し生まれたのが加山雄三です。次いで土井別荘の創設者の土井利剛は華族で越前大野藩藩主。別荘は関東大震災で全壊しました。土井別荘の二十年間を記した「松潮園日誌」は茅ヶ崎の別荘生活のあらゆる側面を描いた貴重な資料となっています。少し離れた場所に山階宮別荘跡があります。山階宮とハワイとの関係については別の機会に発表します。

次いで「石川村」について案内します。日露戦争に勝利した日本は軍人に対して報奨金を支払いました。そこで高級軍人は当時土地の値段が安かった茅ヶ崎に別荘をこぞって建築しました。特に旧加賀藩出身の軍人が中心になって茅ヶ崎に進出して来ました。安東貞美(旧加賀藩ではありませんが旧加賀藩出身の木越安綱の親戚)・木越安綱・竹橋尚文・柴野義弘・九鬼隆一・南弘等が別荘を取得しています。その他にも旧加賀藩出身者は大勢おりますが、中でも河合辰太郎が「石川村」の世話役として関東大震災の時、自分の家が倒壊しているにも関わらず他の家の心配をしてみ舞っていたとその著書『湘南消夏録』に書いています。

その他今回の有名人の経歴を簡単に記します。まず進別荘跡の進経太は石川島造船所の創業者の一人。進経太の奥さんは箕作家の出身。隣の広田別荘跡の広田精一は広島県出身で明治四十三年ごろ結核療養のために南湖院へ通い別荘を購入しました。広田精一は茅ヶ崎への貢献度が高く、松の植林・茅ヶ崎初の発電所の建設・道路整理意見書の茅ヶ崎市への提出等多方面で活躍しました。坪井別荘跡の主坪井正五郎は日本に「人類学」を創設した人です。コロボックル説の提唱、弥生式土器の報告(弥生式土器の命名は坪井が東大のある弥生町で最初に発見した事から名づけた)、人類学に関する啓蒙活動を行っていました。この近くで

は寒川町安楽寺裏の応神塚古墳の発掘も行っていました。大正二年ロシアでの万国学土院連合大会に出席するも病の床に伏し、その後ドイツ・ペテルブルグで永眠しました。最後に牧野英一邸跡に到着しました。牧野英一は刑法学者。東大仏法科卒業後母校の教授になりました。大正七年頃茅ヶ崎に別荘を建築しました。長く茅ヶ崎に居住し文化人クラブ初代会長、そして茅ヶ崎市名誉市民の第一号となりました。

今回で茅ヶ崎の別荘地巡りは終わりました。茅ヶ崎市社会教育課の後援を得て毎回茅ヶ崎市の広報に掲載して頂いたお蔭で、全六回を通して延一六七名の参加を頂きました。参加者の方本当に有難うございました。そして別荘人及び別荘に関わる場所を含め一〇九名を紹介出来ました。明治末年には二〇〇軒を超える別荘があったと記されています。まだまだ分からない別荘人もたくさんいると思います。今後とも一人でも多く別荘人を発掘していきたいと思えます。

(茅ヶ崎郷土会を引っ張ってこられた源さんが、千葉県柏市に引

つ越して子どもさんたちと暮らされることになりました。会は抜けないとのことですが、お別れです。多面にわたりご指導いただき、ありがとうございます。〔編集子〕

書誌紹介

小川直之編

『日本の食文化Ⅰ 食事と作法』(吉川弘文館二〇一八年刊行)を紹介します

茅ヶ崎市文化資料館学芸員 松隈雄大

本書は民俗学や歴史学などの研究者らが、食をめぐる民俗や歴史を解説する全六巻シリーズの第一巻である。目次は次のとおり。刊行にあたって

総論「食」の作法と知識(小川直之)

食をめぐるハレとケ(新谷尚紀)

- 1 対概念としてのハレとケ
- 2 ハレの食事とケの食事
- 3 おせち料理にみるハレの食

饗宴と共食(渡邊欣雄)

- 1 宴の語義を求めて
- 2 宴の多義性と定義
- 3 饗宴の共食に伴う主客関係
- 4 共食物の「ちから」
- 5 共食物によって異なる

饗宴

食物贈答(山崎祐子)

- 1 共食と贈答
- 2 中元と歳暮
- 3 食物を集めることと分けること

神饌(黒田一充)

- 1 神仏への供え物
- 2 さまざまな供え物
- 3 神饌の運搬と食事

ユネスコ無形文化遺産の「和食」

(小川直之)

- 1 日本の食文化と「和食」
- 2 ユネスコ無形文化遺産代表一覧表

に記載された「和食」

考えられること―「和食」の概念― 4 「和食」という用語とその有効性 5 「和食」の視座と食文化研究

三度の食事(藤井弘章)

- 1 二度食から三度食へ
- 2 近代化のなかでの三度食の固定化
- 3 農山漁村における食事回数の多様性
- 4 食事回数の均質化

箸と椀・膳(印南敏秀)

- 1 食具の構成と生活様式
- 2 箸の歴史と食文化
- 3 ワンの歴史
- ― 椀・碗・椀―
- 4 多様な膳と食事
- 5 食具の人間工学
- 6 食具からの文化研究

焼く・煮る・蒸すと火の文化(石垣悟)

- 1 火処の移り変わり調理法
- 2 信仰としての火と食
- 3 火をめぐる人と食の関係

料理人(竹内由紀子)

- 1 「料理」・「料理人」とは
- 2 古代・中世の料理と担い手



- 3 近世の料理文化と料理人 4 家庭の料理と調理師の料理
 ファーストフードとスローフード (関沢まゆみ)
 1 ファーストフードの二つの意味 2 江戸のファーストフード
 3 アメリカ資本のファーストフード 4 スローフード
 索引 執筆者紹介

本書の目次は右のとおりで、括弧内は各章の執筆担当者名である。本書は、日本人の食をめぐる価値観や作法といった社会慣習、調理や食事に用いられる道具、調理法や料理人といった技術とその担い手など、「文化としての食」をテーマに構成されており、民俗学や歴史学などの研究成果に基づいた、一般読者向けの解説書となっている。各章では、それぞれの小テーマの研究史や主要な

風 自由投稿欄

間違いメール

三月十五日(金)のこと、メールが入った。
 相手「お早うございます。朝早くからすみません。久しぶりにお食事でも一緒にできればと思っっているのですが、来週はお忙しいですか?」
 自分「お名前は?」
 相手「名前を入れるのを忘れていました。先日一緒にした橋本で

先行研究も適宜紹介されているので、それらを読むことで、さらに各小テーマについて理解を深めることができる。また、ユネスコ無形文化遺産としての「和食」や、ファーストフードとスローフードといった近年の食をめぐる動向も取り上げられている。

本書冒頭の「刊行にあたって」によると、シリーズ第二巻以降は、「米と餅」、「麦・雑穀と芋」、「魚と肉」、「酒と調味料、保存食」、「菓子と果物」というように、食物の種類ごとにテーマを設定しており、本書は日本の食文化の総説編で、第二巻以降が各論編という位置づけになっているという。食という側面から日本や地域の文化を考える際に参照したい一冊である。

前田照勝

すけど……、久保さんじゃないですか。」
 自分「前田と申します。」
 相手「すみませんでした。友だちにアドレスを聞いて入力の間違ってあなたに届いてしまったみたいなんです。それなのにわざわざ返事を返してもらってすみません。でも間違えて送った人がいい人で安心しました。こんな機会はなかなか無いと思うので、良かった

たらまたメールをしてもいいですか？ しかも男性の方と間違えるなんて、女性の方ですよ？」

自分「いいですよ。今、パン作りをしています。」

(夕方からのパン教室の最中にメールが鳴った。)

相手「あなたのは何て呼んだらいいですか。さつきも聞きましたが女性ですよ？」

自分「残念でした。男性です。七五歳です。」

(相手が男性で、こちらを女性と勘違いしていると思われたのでこれでメールが終わりになると思った。)

ところが、翌日もメールが来た。

相手「昨日はメールに付き合っていたきありがとうございます。私は東京に住んでいる美恵つて言います。気軽にみえちゃんつて呼んでください。あなたのことは何て呼んだらいいですか？」

自分「ホームページの中ではヨハンといいます。飼っていた犬を忘れないようにとこの名前を使っています。この携帯からのメールは苦手です。フェイスブックとブログも続けています。」

(どちらかを覗いて貰えば、自分の素顔が紹介できると思い記してみた。)

相手「私は何もやっていません。ヨハンさんですね。なんかこんな風にメールするのって変な感じだけどころしくお願いします。あ、軽く自己紹介しますね。私は東京の港区の実家に住んでいて、父と母とママ柴のマークと暮らしています。あと、海外に住んでいる兄がいます。仕事は親の会社で投資関係の仕事をして

います。年は二五歳です。ヨハンさんのことも教えてくれると嬉しいな。」

自分「孫七人、茅ヶ崎在住、毎朝二〇人ほどの仲間とラジオ体操をしています。」

相手「朝のラジオ体操は健康的だね。孫が七人つて凄いですね。お子さんは結構いるんですか。私はお兄ちゃんが居るんだ。近所でも有名になるくらい仲がいいんだよね。歳が離れているせいもあるかもしれないけど。こんなことなかなかないし、知らないからこそ話せることつてあると思うんですよ。だから、暇つぶしでも大丈夫なので、色々話してみましようよ。私のことはみえちゃんつてよんでくれたら嬉しいですよ。」

食事会の誘いのメールが入った。相手の名前が携帯の画面に出していない。すぐに何人かの顔が想い浮かんだ。一人目は郷土会の仲間の原さんだ。最近会ったとき、別れ際に「今度、飲もうよ」と声を掛けられた。もう一人はサークル仲間の池内さんである。念のため相手の名前を聞いた。それが始まりである。

「みえちゃん」から一日に何度もメールが来るようになった。一週間で経たないのに二〇回は越えている。質問には正直に答えている。なぜ来るのかは分からない。不思議でならない。メル友なら他にもいるだろう。同年代の交流もあるだろう。何か警戒しなければいけないのだろうか。

現在の私は、新たな交友などは求めていない。それなのにこの展開はどうしたことか。



湯島天満宮境内にある婦系図の作者泉鏡花の筆塚

歌九首

今井文夫

元旦の朝、歳神様にお供えをして
今年こそ平和であれと願ひ込め

お神酒供えて柏手を打つ

孫に合格祈願のお守りを買おう

白梅の咲き始めたる湯島の宮

おみくじ結ぶおみなご幸あれ

庭にめじろ二羽、夫婦か親子か仲むつまじく
梅が枝に見え隠れするめじろ二羽

みどりあざやか春よびさます

庭の水仙の生命の強さに感動して

からからの大地に凜と水仙の

みずみずしさよ生命(いのち)の精か

明日は立春、春はそこまで、平成を惜しむ
恵方巻きほうばりながら春を待つ

平成最後の節分の夕べ



高砂緑地内にあった松籟荘（原安三郎別荘）当時からある石燈籠

梅祭りにて二首詠める
甘酒の手にぬくもりを樂しみて
かすかな春に酔う梅まつり
松陰にそつとたたずむ石燈籠
松籟荘を今に伝える



桜満開の小田原城のお堀

満開のさくらを惜しむ
春雨にけむるお堀の桜花
雨のしずくに堪えて忍べよ
柿の若葉のふくよかな匂いに誘われて
柿の葉の萌えいずる梢浅黄色
春の香(か)満ちて胸の高鳴る

茅ヶ崎郷土会 活動報告

国指定記念シンポジウム

「下寺尾西方遺跡を考える」に参加して

羽切信夫

国指定史跡「下寺尾官衙群」と重なって所在する弥生時代の環濠集落跡が、平成三十一(二〇一九)年二月二十六日に「下寺尾西方遺跡」として国の史跡に指定された。このことを記念して、三月二十三日に、シンポジウムが茅ヶ崎市教育委員会主催により茅ヶ崎市分庁舎六階のコミュニティホールで開催されました。前日の初夏のような好天気から一変して、小雨の降る寒い天候でしたが、市内はもとより神奈川県内各地から約一〇〇名の人々が参加していました。

シンポジウム開催の趣旨説明を茅ヶ崎市教育委員会の大村浩司さんが行った後、基調講演一として岡本孝之さん(神奈川県考古学会会長)が「神奈川県弥生遺跡」を、続いて同講演二として谷口肇さん(神奈川県教育委員会)が「下寺尾西方遺跡の出土遺物からわかること」を行い、午前の部が終わりました。

午後は、同講演三として伊丹徹さん(神奈川県教育委員会)が「環濠について考える」を行いました。

記念講演は、安藤広道さん(慶應義塾大学教授)が「下寺尾西方遺跡の意義とその保存活用」を一時間三〇分にわたり行いました。安藤教授は「歴史実践から見た下寺尾西方遺跡の今後」について、「下寺尾西方遺跡に限らず、保存された遺跡が多くなるとの歴史実践の場として『活用』されるためには、多様な歴史の間

にどのような対話のネットワークを構築していくかを考えていかなければなりません。それは、考古学者はもちろん、皆さんにも求められることとなりますし、とりわけ遺跡を整備する自治体にとっては重要な課題になるものと思っております」と述べて講演を終わりました。

その後、進行を大村浩二さんと三戸知也さん(茅ヶ崎市教育委員会)がつとめ、安藤教授と基調講演を行った三人がパネリストとして登壇し討論が行われました。四人のパネリストの優れた知識や経験が語られ、特に安藤教授の講演内容についての質問や意見が出されて有意義な「国指定記念シンポジウム」は成功裡に終了しました。

今後は、茅ヶ崎市や茅ヶ崎市教育委員会が、このシンポジウムで行われた報告や提案された意見などを尊重して、保存活用案を具体的に進めることを期待します。

茅ヶ崎郷土会とホームページ

平野文明

どのような人が、どれくらい見ているのか、かいかも分からない状態ですが、当会のホームページをセッセと更新しています。

「郷土らがさき」136号(平成28年5月1日発行)の最終頁に「ホームページ開設」とあり、URLが載っています。これは当会の初代のホームページのことで、行事予定やその事後報告を掲載しながら29年の秋ころまで更新されていました。担当さ

れた会員から、終了したい旨の相談があつたのですが、私をはじめ、後を継ぐ勇氣のある人がいなくて、そのままになってしまいました。

皆さんが今、目をとおしているこの「郷土らがさき」は、ずっとモノクローム印刷で刊行しているのですが、掲載している写真が潰れたりして、うまく印刷できないことが多々あり、「これじやイカン」と考えたのが、ホームページに掲載すればカラー写真のまま公開できるということでした。

素人の恐ろしさです。何も分からないまま、当会の**2代目のホームページ**に手をつ突っ込んだのが、平成30年の1月でした。おかげで悪戦苦闘が今に続いているという次第です。ホームページ作成用のソフトはいろいろとあつて、たまたま私が見つかったのは無料版が提供されているワードプレスというものでしたので、初代をそのまま引き継ぐことができなかつたのです。

「茅ヶ崎郷土会がホームページを運営して、どんな効果が期待できるのか？」が、今ぶち当たっている課題です。

私はパソコンを使って闇雲にホームページの更新に立ち向かっているのですが、世の中の情報世界は、パソコン時代からスマートフォンやタブレットに移っているようです。

また、郷土会々員の年齢構成が、70歳代、80歳代にあることも考えなければならぬようです。

そのような状況の中で、当会のホームページは、どのように運営すればその有用性を主張できるのか、という問題です。

「よそ様がおやりになつているので、ウチもちよつとやってみよう」がとおるほど甘くはないようです。

今月、4月2日に、当会のホームページを見ている人、そのための原稿や画像を送つて下さっている方々に集まつて貰つて、「何でもいいですから、ご意見があつたらお聞かせ下さい。そのご意見、ご感想がホームページ運営の活力になります。」という座談会を開きました。しかし「何でも良いですから」では、かえつて何を言つていいか分からないだろうと考えて、

(1) 会員やその他の皆さんに喜んで貰える内容にするにはどうしたら良いでしょうか？

(2) 郷土会にとつて、ホームページ運営の必要性は何でありましょうか？ と問いかけました。

そうしたら、次のような発言が続きました。(これは当日参加されていた会員の前田さんが、箇々の発言を「自分のホームページに発表されたものに少し手を加えたものです。)

① ホームページのメニューにある「これからの行事予定」を一番先に見られる位置に移す方がいい。

② ホームページの内容は記録となり、データベースになる。

③ 対外的にも発信する必要がある。

④ 皆さんの家庭にある、昔の写真を提供して欲しい。(これは私の発言。ちまたのニュースだけでなく、昔に撮影された風景や祭礼などの写真も掲載していきたいのでという趣旨で。) 加えてタイムリーな写真があつたら送信して欲しいと言いました。

⑤ 協力者を増やす。(多くの方から、ニュースや話題を提供頂ければ内容が豊富になるという発言。)

⑥ 記事の感想など、コメントが来れば読者との接点が生まれる。

⑦トップページを見やすくする必要がある。(このご意見に対しては、私にはそれを実現できる技量が不足しております、とお応えしました。誰か助けて！)

⑧あるサークルのホームページをかつて立ち上げたが、負担が大きく、挫折した体験がある。

⑨人物紹介のような身近な内容があってもいいのではないか。

⑩二十三ヶ村の調査(というのを今、郷土会でおこなっております)に協力していただいた方の紹介はどうだろうか？

⑪杉山会員の野鳥の紹介コーナーは、写真と説明があつて良い。

⑫坂井会員が写している膨大な写真もどこかで活用したい。

⑬各地の郷土史サークルで、HPを公開しているところとリンクを張らして貰えると、より多くの方が見る機会となる。

これらのご意見は、私にとつてすごく刺激になりました。そして悟ったのは、郷土会のホームページの有用性は(1)行事予定など、会のホット情報を欠かさないこと、(2)70年に近い歴史をもつ茅ヶ崎郷土会の知的財産をデータベースとして組み直し、発信すること、(3)茅ヶ崎市全体のPRにつながるよう心がけることにある、でした。「出来もしないこと言ってしまう」「感もありますので、今は「私の願い」としておきますが…」

【郷土会ニュース】

今年も大岡越前祭で、遺跡写真展

5月18日(土)・19日(日)の2日間、市民文化会館で大岡越前守遺跡写真展を開きます。18日は堤にある旧和田家住宅と、2か所で行います。見に来て下さい。

堤にある浄見寺(浄土宗)に鐘楼ができる

梵鐘は、京都の妙心寺(臨濟宗妙心寺派大本山)に保管されている、日本最古の紀年銘(698年)を持つ、国宝の梵鐘がモデル、とは菱科住職のお話。「撞くほどに音が良くなるのでどなたでも撞いていいですよ」とも。確かにすばらしい音色で、余韻もすばらしい鐘の音です。(文)

「郷土らがさき」144号 正誤表

・8頁下段11〜12行「忠盛と忠度の間違いか。」↓「忠度とすべきを忠盛として間違ったか。」・20頁「編集後記」の1行目「来年は」↓「今年は」(ウェブ版は修正済みです。)

【編集後記】

今、平成三十一年度(令和元年度)の行事予定表を作っておりますが、まだ完成しておりません。総会は5月24日に予定されていて、それから公表では遅すぎますので、理事会で認められれば、ホームページでお知らせします。

会のHPは「茅ヶ崎郷土会」を検索することで見るができます。URLは <http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/> です。「意見」感想を待っております。どうぞ、平野(090-8173-8845)まで。

